

候。又是よりも前、於御國御川狩有之候節、御近習頭奥村
 瀧兵衛へ、水をあび候様に御意有之候。瀧兵衛裝束をぬぎ、
 脇指を手所持、其邊に御徒大場十郎左衛門罷在候所、此脇
 指持て居候様に仕度旨申候所、御家來御呼寄、爲御持可
 成候と申候て持不申候。瀧兵衛又物を可申と仕候所、あれ
 は身が徒者也と御意に候て、其通に罷成候旨。十郎左衛門
 は大場源太夫弟にて、其時分御奥小姓附御横目相勤候由。
 樋成人の物語に候故書記しぬ。

一、直江山城守兼續傳

直江山城守兼續、父曰樋口與三衛門某事、上杉景勝母掌新
 標。兼續美而哲。景勝悅而寵之。老臣直江大和守實死而無
 子。景勝使繼其家。長而有材氣。遂爲景勝之重臣。其報允
 長老書。傳播于世。觸撥東原官之震怒。兵端萌于此矣。然
 嘗怪其書辭氣雖悻悻。而飽滿沈壯。無窒塞之累。似曉文
 字者。適見四家合放。稱其有文學。賦詩二句。曰。春雁
 似吾吾似雁。洛陽城裏背花歸。一樽知味。頗能詩者。因考
 本館所撰詩集。得詩二首。其一賦織女情別。曰。二星何恨
 隔年逢。今夜連牀慰鬱胸。私語未終先洒淚。合歡枕下五

更鐘。句語洗刷。殆非龜人口氣。及閱羅山先生五臣注文
 選跋。始知兼續之所梓行。於是方信其注意文字合放之語
 不妄也。兼續頗有將略。惜其肆意反噬。寇鈔山形。陷烟
 屋。攻長谷堂。與最上義光相持。聞關原之敗。旋師于會津。
 皆有法度。時人稱之。唯上山之戰不用。上泉主水之旨。使
 之憤激致死。不厭人望耳。總之兼續罪魁也。當與逆黨同
 誅夷。而東照宮包荒之量。赦而不問。及難波轉兵。志貴野之
 戰。出奇制勝。雖功不贖罪。而竭力戎事。干戈既戢。能以
 文籍自娛。當時武夫健將。亦所罕有。偶因論詩及之。

澹泊齋安覺筆記

余高祖父諱政重。嘗爲兼續婿子。往米澤稱直江大和勝
 吉。生一男。稱大德。長稱志摩政次。其子五兵衛朝政。其
 子采女定政。實余兄弟之所天也。以其直江氏之外孫也。
 鳩巢先生抄水戸史館筆記以寄致焉。澹泊齋姓安積名覺。
 史館編修官也。于時己亥林鐘初六日。禮辭寫。

一、狩野常信の狼狽

狩野常信老後稱古川、又養朴とも云。此者探幽以後の上手
 と世上に申候候。爲人峭直にして衆に容れられず、懲罰の

時罪を獲て蟄居せしかども、晩年には又出たり。我公府に
 所藏の細川澄元が畫像は、故實備はりぬるよしにて其名世
 に流布す。故に或時常信此畫像を致熟覽、模寫もいたし度
 よし奉望候。依之公家へ被爲召、於書院展觀せしめらる。
 常信甚喜び令熟視候最中へ、公家俄に御出御挨拶被成候
 所、常信遽然として居心を失ひ、其畫像を超え跨で拜伏し
 ぬ。その常信度を失ひし事を疾み給ひ、自是以來思召にも
 不叶、右畫像を寫させられず成ぬ。中村與助氏誌

畫像の様、甲冑しめ馬に騎る。胡箭、鞭等のしたゝめ様及
 かま・さし細など、明細にゑがきぬ。古式多備ると云。

一、菊一文字の御刀

菊一文字御刀は高徳公の御指料也。後鳥羽院御作にて、什
 器の其一也。前年二條左大將吉平公へ、御埒引出物に被進
 也。其頃の御道具奉行、右の由緒有之御什物と云事は不存、
 唯代金七拾枚許との被仰出にまかせ候て、相掬、伺候て相極
 候。其頃前田源隨等老臣罷在候は、たとひ相極候うへに
 ても、申上様も可有之候へども、左様の心附無之候。奉行
 たる者は心得可有之ものに候。代金の位迄に心附候故か、

る儀有之候。埒殿の御引出物に候へば、か様にも可有之儀
 と申ものも候へども、某は左様に不存候と云。

一、興法寺村七三郎の至孝

元祿十一年戊寅越中礪波郡興法寺肝煎長右衛門方に、手立
 有之柵有之旨、同村の者十村迄告訴。之に付長右衛門禁牢
 し吟味の内、長右衛門惣領の子七三郎自ら訴けるは、柵の儀
 長右衛門會て不存儀也。私の所爲たるよし相斷候に付、是亦
 禁牢す。同類等の儀吟味敷度にて、及拷問といへども憂色
 もなく、己れ一人の悪事にて同類無之由、度々の口狀同然
 也。かゝる所に七三郎子傳吉十五歳七三郎妻くら等十村
 迄罷越、手立の柵の儀、七三郎儀少も不存事に候得共、父
 長右衛門御免爲可被成、親の命に代り可申が爲に罷出候。
 弟共へ妻子介抱の儀頼の由書置仕、弟共に爲致與書、せがれ
 へ相渡、此儀七三郎死後にも沙汰仕間敷旨堅く申付置候。

乍然長右衛門に今御免無之候へば、無科長右衛門・七三郎
 兩人とも、罪科に可罷成儀如何と、父の申付をも背き申出
 候由にて、右之書付差出候。扱柵の儀は長右衛門次男彦三郎
 一人の所爲の由。依之於公事場七三郎へ、其方柵の手立不